分業の経済学的考察

山本二三丸

まえがき
1　分業の簡単な意味
2　分業の歴史的端緒形態
3　分業の展開過程
4　資本主義社会における分業の実態とその社会的・経済的意義
a）マニュファクチュアおよび機械制大工業のもとでの分業
b）人間労働力の歪曲・萎縮ならびに破壊
c）精神労働と肉体労働との対立
d）都市と農村との対立
e）寄生的諸階層の肥大化
5　共産主義社会における分業の揚棄の問題
簡単な要約

まえがき

さきに本誌第41巻第3号（1988年1月刊行）に掲載された拙論，『人間労働力と人間的労働——資本主義的生産様式のもとでの在り方——』は，その題名こそ異なっているものの，1961年3月刊行の本誌第14巻第4号所載の拙論，『人間的労働の経済学的考察』を出発点としてそれ以来——さまざまの止むをえない事情によってしばしば中断せざるをえなかったのであるが——10回にわたって，同じテーマのもとにつづけられてきた「人間的労働」にかんする論究の一端を成すものだということは，その拙論の「まえがき」にも明らかにされていたところである。しかし，なお念のため，「人間的労働の経済学的考察」という論稿全体の組み立てをいま一度明示しておくことが，このさい適切ではないかと考えられるので，つぎにその章題を順次にかかげ，そのうちの「4」の内容については，なお未発表であるので，この章を構成する各小節の表題を付記しておくことにしたいと考える。なお，「3　資本制的私的所有のもとでの人間的労働」の内容は，前記の拙論，『人間労働力と人間的労働——資本主義的生産様式のもとでの在り方——』としてさきに発表されたものだということは，後者の副題によってもたやすくうかがい知ることができるところと思われる。

「1　人間的労働の基本的意味
2　本来的私的所有のもとでの人間的労働
3　資本制的私的所有のもとでの人間的労働
4　社会的所有のもとでの人間的労働
(1)　社会的所有の意味
(2)　社会の真実の主人公としての人間

(3)　高度の発達をとげた人間労働力

(4)　人間労働力の社会的・計画的流動

(5)　労働の二面性の意識的・計画的活用

(6)　人間本来の欲求としての労働

(7)　労働の生産力

(8)　社会的取得法則

(9)　発展法則

5　総　括　　」

以上の説明によっても，私にとって早急に果すべき課題が，ひきつづき「4　社会的所有のもとでの人間的労働」と「5　総括」の内容を仕上げることにあることは，明らかである。だが，「4」を構成する各小項目について検討をすすめる過程で，私は，それらすべての論究に先き立って，いまひとつ，明確にしておかなければならない決定的に重大な問題が介在していることに気がついたのである。それは，分業の問題である。

私は，およそ30年あまり以前から，一冊のノートの中に，さまざまな自戒の言葉や将来自分の課題として解決すべき経済学上の諸問題をあれこれ書き留めることにしてきたのであるが，その中には，「資本論解説」，「価値理論の体系的研究」，「賃銀論解説」，「日本資本主義分析」などといった，まことにおこがましい題目と並んで，「分業の経済学的考察」という文字が見出されるのである。「分業」の問題は，そのころから私の念頭を離れたことはなかったが，そのほかの当面する重要な理論的諸問題との取り組みに追われてこれを追究する余裕もなかったような次第である。ところが，最近になって，私は，念願の「人間経済学」に着手しなければならないことに気がついて，遅まきながら，原始共同社会からはじめてそれ以降の歴史的諸社会の中での「人間」の在り方を曲りなりにもとらえなければならないと考えて，そのためにつたない努力をはらうことをよぎなくされたものである。そのような杜撰（ずさん）な勉強にとりかかってみると，そこで私は，「人間的労働」の論究は分業の側面をぬきにしては重大な欠陥をもつものとならなければならないことにはじめて気がついたのである。

もともと私が「人間的労働」の論究を目ざした主たる狙いは，マルクス『資本論』の精確な理解を得ることであり，したがってそのために，「人間的労働」も，つねに，「価値」という概念に結びつけられて把握されていたといえる。ところが，資本主義社会を離れて，それよりもはるかに広い視野に立って，すべての歴史的社会を通じての「人間」の在り方，労働主体としての人間の在り方を考えなければならないことになると，そこには，必然的に「分業」の問題が，きわめて大きな比重をもつ決定的要因として存在するものだということが，否応なしに前面に出てくるのである。そこで，私は，さきに記した「4　社会的所有のもとでの人間的労働」の論究にとりかかるまえに，まずもって分業についてのあらましを，とくに「人間的労働」の側面との関連において把握しておくことが肝要だと考えたのである。分業についてその

要点を明らかにしたところで，その成果をとりいれて，はじめて「4」の内容も十分妥当な形で展開できるものだとすれば，これまで発表してきた「人間的労働の経済学的考察」のはじめから「3」までのすべての内容も，その意味で再検討してさらにより広い視点からの組み立てが要請されて然るべきだとも考えられる。しかし，現在のところ，私としては，分業についてその要点を把握しえたならば，その成果とこれまでの「人間的労働の経済学的考察」の論究とを念頭において，私のいわゆる人間経済学なるものを構築することがなによりも肝要であり，それによってこれまでの論究の欠陥なり不足の点なりを多少とも補い，またただすこともできるのではないかと考えたのである。それゆえ，この小論では，分業についてその全面的な体系的論究をすすめることがその課題となっているものではなく，さきにも述べたように，これまでの「人間的労働の経済学的考察」の欠陥を補うものとして「人間的労働」を分業の側面から——というよりも，むしろ「人間」そのものを中心として，とらえるべきであるが——簡潔に考究するものにすぎないということを，したがってここでの論究の重点はやはり資本主義社会における分業の特徴と意義をとらえることにあるということを，あらかじめおことわりしておきたいと考える。

1. 分業の簡単な意味

分業という言葉は，きわめて簡潔で，その意味するところはだれにでもわかるようなものだと思われがちであるが，しかし，いわゆる常識的なとらえ方は，正確な理解にほど遠いもので，しばしばその内容を誤ってとらえることが少なくないのである。まず最初に注意しなければならないのは，この「分業」という日本語について，そのうちの「業」をば「職業 occupation」と解することはまったくの誤りだということである。「分業」の原語は，英語では division of labour，ドイツ語では Teilung der Arbeit であって，右の「業」は labour または die Arbeit，つまり労働の訳なのである。ところが，日本語の「業」は，ふつう職業，つまり「めしのたね」である仕事であれば，なんでもこれにふくまれることになっている。だから，そこには，たとえば，不動産周旋業でも金貸業でもはいることになる。しかし，labour または die Arbeit は，そうした「めしのたね」としての職業ではなくて，労働を指しているのであり，その労働とは，人間および社会の存続を支える必要物資の生産・流通を担っている人間的労働をこそ指していったものである。やさしくいえば，人間生活にとって必要なさまざまな物資を獲得し，またはつくりだし，それら生産物を人間が充用するのに適当な形に加工したりする，人間の具体的・有用的労働のすべてがそこにふくまれているのであって，英語の indutry ともその意味は相通ずるものがあるといえるのである。それゆえ，日本語訳として，かつては，「分労」という言葉も用いられたのであるが，今日ではこの言葉は見当らず，おしなべて分業という訳語が採られているのである。

経済学の分野で「分業」という言葉を最初に採用したばかりでなく，これに決定的な意義を与えたのは，ほかならぬ Adam Smith であって，このことは，その主著『諸国民の富 An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations』の第1篇「労働の生産諸力における改善の諸原因について，また，その生産物が人民のさまざまの階級のあいだに自然に分配される秩序について」の冒頭の第1章が「分業について　Of the division of labour」と題されていることによっても示されているが，なお，この章題について編者キャナン Edwin Cannan がとくに付けている注記がその由来を説明しているので，そのなかから要点を抜粋してみることにしよう（〔　〕内は山本の付記）。

「この「分業」〔division of labour〕ということばは，従来まったく用いられなかったわけではないが，当時の日常用語ではなかった。それがここにあらわれたのは，おそらく Mandeville, Fable of the Bees, pt, ii (1729) dial vi., p. 335 のつぎの章句に由来するものであろう。「クリオメニス――……いったん人間が成文法で統治されるようになると，他のすべてのことも迅速にうまく進行するものだ。……いったん人間が静穏を享受し，だれもその隣人を恐れる必要がなくなると，人間集団は一人のこらずその労働を分割し細分することを学ばずにはいられないようになるであろう。ホラティウス――ぼくはきみのいうことがわからない。クリオメニス――まえにも暗示しておいたように，人間というものは，他人のすることを見ると自然にそれをまねたがるもので，野蛮人がみな同じことをするのもこのためであり，かれらはつねに自分たちの境遇をよくしようと思いながら，これにはばまれてそうすることができない。けれども，もしその一人が弓矢をつくることに専念し，もう一人が食物を調達し，第三の者が小屋を建て，第四の者が衣服をつくり，さらに第五の者が器具類をつくるというようにすれば，かれらはたがいに有用なものになるばかりでなく，かれらの生業〔callings〕や職業〔employments〕は，このすべてをおのおのがごたまぜにやるよりも，同じ年数のあいだにずっと長足の進歩をとげるであろう。　ホラティウス――ぼくはきみがまったく正しいと思うし，また君のいうことが真理だということは，時計を製造するばあいなによりもはっきりするのであって，現にそれは，もしこの全部がいまだに一人の仕事としてなされているばあいに到達したであろうよりも，もっと高い完成の段階に達しており，また柱時計や懐中時計が豊富で，正確で，しかも美しくできているのさえ，その製造技術が多くの部門に分割されていることに主として起因する，と僕は確信している。」この書物の索引には，「労働，それを分割したり細分したりすることの有用性」という項がある。……」(An inquiry into the nature and causes of the wealth of nations. Charles E. Tuttle Company, 1979, p. 3. 大内兵衛・松川七郎訳，岩波書店，I，p. 67-68)。

スミスは，キャナンの記しているように，おそらく Mandeville の著書のうちの右の記述に学んだものとおもわれるが，しかし，右の Mandeville の叙述にせよ，またその用語を踏襲したと考えられる Smith の主張にせよ，分業をとらえて人間が頭の中で考えてつくりだしたも

の，生産物を豊富にするために考えだされたものというようにとらえることはまったくの錯誤というべきであろう。しかし，そうした誤解は，原始共同社会についての知識がほとんど欠けているだけでなく，当時勃興しつつあった分業を基本とする典型的な生産形態であるマニュファクチュアこそが永遠の繁栄を約束された文明社会である資本主義社会を支えるものと確信していた当時のスミスにとっては，きわめて自然的なことであったといえるのである。

「分業」という言葉については，なおつぎの点をあらかじめ注意しておくことが適当である。それは，右の labour が，簡単にいって「社会の存続にとって必要不可欠な具体的・有用的労働」であるとしたとき，その「社会」の意味内容をどのようにとらえるのか，ということである。たとえば，原始共同社会における家族も一つの社会であり，資本主義社会も一つの社会である。ところが，スミスがそれに執着してやまないマニュファクチュアもやはり一つの「社会」としてとらえなければならない。それぞれ独立した，まったく別個の二つの民族が存在していて，それら相互のあいだで互いに必要とする生産物を交換するとすれば，その交換される生産物の生産における労働については，やはり division of labour，つまり「労働の分割」が行なわれ，そこに分業が存在するものと考えなければならない。

この拙論の主たる課題は，資本主義社会における分業の意義の解明の上におかれているのであって，そのかぎりでも，それぞれ異なった経済単位のあいだの分業と，同じ一個の経済単位の内部における分業とが，当然にとりあげられなければならない。そこで，私としては，まったくお粗末ではあるが，資本主義社会以前の，いいかえれば，原始共同社会いらいの分業の「史的発展諸形態」についてごくおおまかな観察をこころみることからはじめて，それらの歴史的諸形態が資本主義社会においてどのような形で存在しているかということをうかがいつつ，資本主義社会に特有の分業諸形態のあり方，その社会的・経済的意義を明らかにすることにつとめたいと考える。要は，分業による人間の在り方の規定，とくに資本の支配する資本主義社会において人間そのものが，その特殊・歴史的な分業形態によってどんなに歪められるかという点を，しかと見届けることにある，と私は考えるのである。つぎの「2」と「3」は，いわばそのための「まえおき」にほかならないといってよい。

2. 分業の歴史的端緒形態

エンゲルスは，その晩年の有名な著作，『家族，私有財産および国家の起原，,,Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats''』（1884年）の結びの第9章「未開と文明 Barbarei und Zivilisation」の冒頭において，

「われわれは，いま，ギリシア人，ローマ人，ドイツ人という三つの大きな個々の実例について，氏族制度の解体のあとをたどってきた。結びにあたってわれわれは，すでに未開の高段階において社会の氏族的組織を掘りくずし，文明の到来とともにこれを完全に一掃した一般的

な経済的諸条件を研究しよう。ここでは，モーガンの著書と同じくらいに，マルクスの『資本論』がわれわれに必要となるであろう」(Marx-Engels Werke, Bd. 21. s.152. 邦訳大月版，158ページ)

と述べて，以下で原始共同社会の解体と文明社会への移行の過程を条件づけた主要な要因について簡潔な記述をこころみている。モルガン（Lowis Henry Morgan）の主著『古代社会（,,Ancient Society, or Researches in the Lines of Humaan Progress from Savegery, through Barbarism to Civilization", 1877)』はすでに一世紀余りむかしの労作であり，また，主としてこれに拠って書かれたエンゲルスの上記の労作もやはり一世紀も前に出たものである。それ以後今日にいたるまで，考古学および人類学の分野での調査研究は著しい進歩をとげており，モルガンやエンゲルスの原始共同社会および古代社会にかんする記述のうちには訂正を要する部分が少なからず見出されるのは，争えない事実であるといってよい。しかし，ここでは，さきにも述べたように原始共同社会および古代社会についてたちいった考察をするのが目的ではなく，現在の資本主義社会における分業のあり方，その社会的・経済的意義を考察することに重点がおかれており，そのためのいわば序説（introduction）として，分業の歴史的発生と展開とを簡単にかえりみておくことがまず必要であると考えられたのであって，そのかぎりではエンゲルスの著書の該当部分は，一応基本的な点において大綱をとらえているものとみることができると考えられる。私としては，原始共同社会（氏族社会）の解体と文明社会への移行を条件づけると同時，またこの解体＝移行によって促進された最大の要因はまさしく分業の発生と展開にあると考えるので，その点にかんするかぎりでエンゲルスの右の労作を参考にしたいと考えるのである。

エンゲルスは，さきに引用した文章にひきつづいて，

「氏族は，野蛮の中階段で発生し，その高段階でさらに発展したが，われわれのもちあわせる資料で判断できるかぎりでは，未開の低段階でその最盛期に達する。そこでわれわれはこの発展段階から始めることにしよう」(ibid. Bd. 21. s. 152. 邦訳158ページ)

と述べて，以下氏族制度の解体を規定した諸要因，なかんずく分業および分業の発展過程について説明しているので，ここではまず未開の低段階における分業の状態から，その要点を適当に摘記してゆくことにしよう。

まず，この段階での生産は，狩猟と漁撈（および戦争）に限られており，人口も稀薄，労働の生産力はきわめて低い。ここではじめて生まれる分業は，まったく自然発生的なもので，それは両性間での労働の分割である。すなわち，男は，戦争に従事することを除いて，狩猟や漁撈に従事し，食事の原料やそれに必要な道具類の調達にあたり，これにたいして，女は，家の世話をし，食事や衣服の調製，料理，織り仕事，裁縫に従事する。この場合注意すべきは，どちらも自分で製作し使用する道具，すなわち，男は武器，狩猟・漁撈具の，女は什器などの所有者であり，また，共同でつくり共同で利用するもの，たとえば家，園圃，長ボートなどは，

共有財産である。だから，「自分で働いて得た所有」《Selbst bearbeitete Eigentum》という，資本主義社会でのまやかしの言葉が真実妥当するのは，ここだけなのである。

ここに記したような未開段階の分業は，歴史的に存在したものであるばかりでなく，それは文明社会，とくに世界が資本主義経済によって支配されるにいたった段階においてもなお原始的生存条件のもとにおかれているいわゆる未開民族の間においても観察することができるのであって，その一例として，ハインリヒ・クノー（Heinrich Cunow）の大著，『一般経済史，——原始的採集経済より高度資本主義に到るまでの経済発展に関する一概観』（Allgemeine Wirtshaftgeschichte;——Ein Übersicht über die Wirtschaftentwicklung von der primitiven Sammelwirtschaft bis zum Hochkapitalismus. J. H. W. Dietz Nachfolger, Berlin, 1926～31）の第1巻『自然民族及び半開民族の経済』（Die Wirtschaft der Natur-und Halbkulturvölker）の中から，その第1章「タスマニア人およびオーストラリア人の採集経済および狩猟経済. Sammel-und Jagdwirtschaft der Tasmanier und Australier」をとりあげて見ることにしよう。この章は，その題名の示すとおり，近代にいたるまでかつての原始共同社会におけると同様とみられるきわめて原始的な経済生活を営んでいる実態を述べている。クノーは，その大著の第一巻ではこうした原始経済のもとにある数多くの未開民族の実態について克明な記述をこころみているのであるが，この第1章のなかには，適当にも「分業 Arbeitsteilung」と題された一節がおかれていて，これについて詳しい説明を見出すことができるので，いささか長文ながら，原始社会の分業の態様をとらえる素材として，またそれ以後における分業の形態の発展＝変化をよりよく見きわめるためにも適切な資料を示しているものと考えられるので，読者諸君のお許しをいただいて，その全文をつぎに引用してかかげることにしよう。

「右の説明からもわかるように，既にオーストラリア人の間に於て，食料調達に関して，男性と女性との間にかなり広汎な分業が，——男子の労働と婦人の労働とへの分化が行なわれていた。それは勿論，多くの種族に於てなお確定的なものではないが，，然し，既に到る処で明瞭に現われ，且つまた屢々既に尊重すべき慣例と考えられ，それを傷けることは威儀や良習に反するものとされているのである。貝や球果を採集しようなどとするオーストラリア人〔男子〕は，多くのオーストラリア種族の間で，富裕の男子が料理用前掛をかけて台所の掃除などすると嘲笑されると同じように笑われるのである。

既にタスマニア人の間でも，最初の植民や探険家は，両性間に或る分業が行なわれているのを見出した。狩猟は何処でも男子の仕事の範囲に属していた。同様にまた男子は，原始的な武器や狩猟用具の製作（拳楔〔Faustkeile〕，削刀〔Schaber〕及び刀〔Messer〕として用いられた石の製作も）や筏式の沿岸航行具の製作を，また多くの民群〔Horde〕に於ては彼等の獲って来た大獣の焙焼まで，男子がこれを引受けた。他のすべての仕事，種子，根菜，蕈，漿果，貝類，蜥蜴，昆虫，虫卵等の採集，更に草や葦で編んだ袋や籠の製作，採集された食料の焙焼，並びに移動の途上に於ける僅かばかりの財産や小児の運搬や引率，及び風障〔Windschirm〕や

原始的な屯営小舎の建設は，タスマニア人の間では婦人の職分に属していたのである。

食料の範囲が拡大されると共に，オーストラリア大陸では，分業もまた拡張された。此処でも狩猟と武器や道具の製作とは男子の仕事で，貝類，小さな爬虫類や両棲類，とんぼ，こおろぎ，小鳥，だが特に食用になると考えられている球茎，樹果及び種粒の採集は婦人の仕事である。或る屯営所から他の屯営所への移動の間や，一定の場所に於ける一日若しくは数日の滞在の間は，彼等の採集活動は殆んど全一日を要し，屢々日々の食物の大部分を供給する。

漁撈はこの分業を更に拡大した。三箇乃至四箇の叉のついた魚叉〔Fischspeer〕や鈎を以て大魚を刺すことは，多く，専ら男子の職分に属していた。之に反して，浅い入江で手で以てする漁獲には，婦人も参加した。彼女等はまた，屢々南部海岸や南オーストラリアの海上で行なわれている，岸の水の中で葉の繁った枝を動かすことによって魚を浅い岸に追い込み，この枝または水中に沈めてあった浅い木盆でそれを陸へ投上げるという習慣的な漁獲にも参加する。小さな手網を以てする漁獲の際にも，通常，婦人が手伝う。之に反して，海岸に於ける貝類や蟹の採集は，依然独り婦人のみに任されているが，ヴィクトリア河やムライ河の下流に於ける小さな清水亀の漁獲には，男女とも略々同じ割合で参加する。然し，大陸の北部海岸及び西北海岸に於ける大海亀の捕獲は，独り男子のみによって行なわれているが，それはおそらく，其処にいる種類の亀の捕獲が困難であり危険であるからであろう」(ibid. Bd. 1. s. 47—48。藤沢保太郎訳，『世界経済史大系』第一巻，昭和16年，育生社弘道閣刊，47—48ページ，〔　〕内は山本の付記)。

このような未開の低段階において，はじめて発生した最初の大きな社会的分業は，牧畜種族の分離であり，それと同時に他方において園圃耕作の発展があり，また手工業の面での著しい発達がおこなわれることになる。

まず，牧畜種族の分離についていえば，それはこれまでとちがった種類の新たな生活資料を豊富に生産することになった——牛乳，乳製品，肉，獣皮，羊毛，山羊毛および紡糸，織物，など——ばかりでなく，異なった種族の間の規則的な交換を可能にし，その上，畜群が別有財産になることを促進し，これが個別的交換をひきおこし，こうして，はやくも家畜が貨幣の機能をはたすものになってくるのである。他方，この段階において，工業の分野でも著しい発達があり，織機の製造や，金属精煉，とくに銅と錫および両者の合金である青銅の生産はきわめて重要な意義をもつものである。というのは，このような牧畜，農耕および家内手工業など，すべての部門における生産の増進は，必然的に，氏族，世帯共同体または個別家族の各成員が負担すべき日々の労働量を増大させることになり，ここに追加的労働力の獲得を必要不可欠のものにすることになったからである。その追加労働力を供給したのはほかならぬ戦争であり，戦争によって獲得された捕虜が奴隷として使役されることになった。つまり，上にあげた最初の大きな社会的分業そのものが，労働の生産性の向上，富の増大，生産分野の拡大を生みだすとともに，当時の歴史的条件のもとで必然的に奴隷制度という階級制度を，主人と奴隷，搾取者と被搾取者という，二つの対立する階級への社会の最初の大分裂を，もたらしたのである。

しかし，分業の発展による社会的変革はこれだけにはとどまらなかった。未開の中段階には，畜群〔die Herden〕が，種族または氏族の共有物から個々の家族の所有へ移行するとともに，家族に一つの革命が起きたのである。さきにみたように生計獲得の手段は男によって生産され男の所有であった。ところが生計獲得の新しい手段として生まれた畜群を馴致し見張ったのは男の仕事であったがゆえに，それは男のものであり，家畜と交換して得た商品や奴隷も男のものである。いまでは生業〔der Erwerb〕によって得られた剰余はすべて男の手に帰して，女は享有するが所有はできないことになった。つまり，家族内の分業が男女間の所有分配〔die Eigentumsverteilung〕を規制していてその分業は前どおりでありながら，家族外部での分業が変わったために，従来の家族内の関係が逆転させられたのである。女がこれまでそれに限定されていた家内労働は男の生計労働の前に影薄いものになり，これによって家族内における男の支配が保証され，かくして男の専制により母権の転覆，父権の採用，対偶婚から単婚への移行，そして最後に個別家族による氏族制度の崩壊への道が開かれることになるのである[1)]。

3. 分業の展開過程

未開の中段階からすすんで高段階にはいると，すべての文化民属〔Kulturvölker〕がその「英雄時代」を経過するようになるが，それは歴史上変革的役割を演じたあらゆる原料のなかで最後の，最も重要なものである鉄によって決定づけられたのである。鉄製の犁頭（すきさき）や斧は大きな面積の畑地耕作と大森林地域の開墾をもたらし，穀物，さや豆類，果実，油，ぶどう酒の生産を増加させると同時に，他方において手工業の発達を促し，機械，金属加工，その他のますます分化する手工業を生みだし生産の多様性と技巧の展開をおしすすめたのであって，このようにして，手工業は農耕から決定的に分離し，ここに，農耕と手工業との二大主要生産部門への分裂が確立することになったのである。

右のような農耕と手工業との分化という分業の展開は，労働の生産性の向上をもたらし，ここからして当然に人間の労働力の価値を高める結果となり，これまで散在的で未発達であった奴隷制を一般化させ，それが社会制度の本質的な構成部分になるものとなったのである。

1）この男女間の地位の転倒および婦人の地位の回復については，エンゲルスは，ここでつぎのような注目すべき見通しを確言しているのである。――「すでにここで明らかになることは，女が社会的生産労働から締めだされて私的な家事労働に局限されたままでいるあいだは，女の解放や，男女の平等の地位は不可能であり，今後も不可能であろう，ということである。女の解放は，女が大きな社会的な規模で生産に参加することができ，家事労働がわずかしか女をわずらわさないようになるときにはじめて，可能になる。そして，こういうことは，近代の大工業によってはじめて可能になったのであって，この近代の大工業は，婦人労働を大きな規模で許容するばかりか，それを本式に要求しており，また私的な家事労働をもしだいに公的な産業に解消することにつとめるのである」(ibid. Bd. 21. s. 158. 訳161―162ページ)。

農耕からの手工業の分離と並んで進行するのは都市への人口の集中・稠密化であり，これはまた個々人の富の急速な増大と結びついて，富者と貧者との差別を拡大することによって新たな分業，すなわち階級的区分を生み出すものとなる。これによって，古い共産主義的世帯共同体は，個々の家長の財産の差によってうち破られ，土地の共同耕作は個々の家族の用益にとって代わられ，また他方において戦争は，たんなる略奪のために行なわれる恒常的な生産部門になり，民属の軍隊指揮者が常設の役員となり，氏族制度を支えてきた諸機関はしだいにもぎとられ，それらは種族がそれ自身の事務を自由にととのえるための組織から隣人を略奪し圧迫するための組織に，人民の意志の道具たる諸機関は人民を支配し圧迫するための自立的な機関になりかわってゆくのである。

以上のようにして，人間社会の歴史はいよいよ文明と称される新たな発展段階に踏みいることになるのであるが，ここで社会的分業はまったく新しい要素を生みだすことになる。それは，商業の勃興による商人階級の形成である。社会の階級はすべて，これまではもっぱら生産に関与するかぎりで存在しえたものであり，生産に参与する人々を指導者と実行者とに，または大規模生産者と小規模生産者とに分けたにすぎない。ところが，商品交換と貨幣流通の発展は，ここに，生産にはまったく参加せず，しかも全体として生産の指導権を奪いとり，生産者を経済的に従属させる階級があらわれたのである。この商人階級の本質を的確に描写しているものとしては，さきにあげたエンゲルスの労作の中の記述ほどすぐれたものはないと考えられるので，これをつぎに引用してかかげることにしよう。

「彼らは，どの二人の生産者のあいだにもなくてはならない仲介者になりすまし，その両方を搾取する。生産者から交換の労苦と危険とを取りのぞいてやり，彼らの生産物の販路を遠い市場にひろげ，こうして住民のもっとも有用な階級になるという口実で，寄生者たち，純然たる社会的寄生動物の一階級が形成される。そのほんとうのサーヴィスはごくわずかなものなのに，彼らはそれにたいする報酬として国内の生産からも外国の生産からもうまい汁をすくいとり，富とそれにおうじた社会的影響力とを急速に獲得し，まさにこの理由で，文明期を通じてたえず新しい栄誉をおび，ついには自分でも独特な一生産物をつくりだすようになる，――すなわち，周期的商業恐慌を」(ibid. Bd. 21. s. 161. 訳165ページ，傍点―山本)。

この商人階級とともにつくりあげられ，商人階級の全能をつくりだしたものは，金属貨幣，すなわち鋳貨の制定と流通である。この鋳貨こそは，他のすべての商品の上に立って，これをいかようにも支配しうるもの，どんな商品――たとえそれが生身(なまみ)の人間そのものであっても――にもその身を変えることのできる魔術的手段であり，これを握っていたのが，ほかならぬ商人である。エンゲルスは，

「貨幣の青春期であるこの時代ほどに，貨幣の力が原始的な粗暴と暴虐さとで発揮されたことは，二度となかった」(ibid. Bd. 21. s. 162. 訳165―166ページ)

と述べているのであるが，しかし，この的確このうえない評語にたいして，今日，20世紀末，

帝国主義諸国に文字どおり君臨する独占＝金融資本の手中にある貨幣が，世界中の勤労人民から，ありとあらゆる合法的・非合法的，文化的・非文化的手口で——おまけに無惨で徹底的な自然破壊をともなって——前代未聞のおどろくべき巨額の収奪をやりとげている手口の扮装ぶりについては，どのような評語がもっとも適切なものといえるであろうか？

分業の展開にもとづく商品生産＝交換の発展が生みだした貨幣，この価値のかたまりとしてすべての人間を支配し奴隷化する全能の貨幣は，商人階級を生みだしたばかりでなく，それは金の卵を生む貨幣として高利貸付を必然的に生みだし，高利貸付業者と，その無慈悲な収奪の餌食である債務者の大群を生み出したものである。さらに，商品および奴隷の富，貨幣の富とならんで，必然的に土地所有の富も出現するにおよんで，土地にたいする私的所有が滲透してゆき，こうして，旧来の氏族制度はますます崩落の一途を辿らざるをえなくなるのである。

分業の展開は，原始的な自然発生的な民主制にもとづいた氏族社会のあらゆる部面にわたってこれをすっかり変革して，自由人と奴隷，搾取する富者と搾取される貧者大衆の対立・抗争の上に辛うじて存続する階級社会へと変質をとげてゆき，この階級闘争の上に成り立つ社会の存続＝維持のための特別の機関として国家なるものを生みだすことになるのであって，これを簡単にまとめていえば，かつての氏族制度は，分業とその分業の必然的な展開とによって生みだされた対立する諸階級への社会の分裂そのものによって，その根底から崩壊せざるをえなくなったものだということができるであろう。このようにして生みだされた国家なるものは，そこに必ず必要な人的構成，すなわち，官僚制度を生みだし，これがまた住民の間の新たな分業をつくりあげることになるのであるが，これについてはたちいって論ずることはひかえよう。

私は，エンゲルスの労作に拠って，以上のような歴史的発展過程をみてきたのであるが，エンゲルスの記述するところは，今日では幾多の点において訂正を必要とするものであるとされている。しかしそれにもかかわらず，私としては，原始共同社会の解体を促進し，それの崩壊につづいて古代社会から封建制社会へ，さらに資本主義社会へと人間社会の変革＝発展を条件づけた最大の動因の一つはほかならぬ分業と分業の展開そのものであって，こうした分業および分業の展開過程にかんするエンゲルスの記述は，基本的にはきわめて正鵠をえていると考えるものである。

さて，エンゲルスは，分業の展開過程を上に述べたように叙述したあとで，これをまとめて，文明についてその特徴づけをつぎのようにあたえているのである。

「文明とは，分業と，分業から発生する個々人のあいだの交換と，この両者を総括する商品生産とが完全な展開をとげて，それ以前の全社会を変革するような，社会の発展段階である」(ibid. Bd. 21. s. 168. 訳172ページ，傍点—山本)。

この文明社会のうちのもっとも高い発展段階こそは，まさしく資本主義社会そのものである。これまで，エンゲルスの記述をたよりに，おぼつかない足どりで原始共同社会からはじまる分業の展開過程をざっと辿ってきたのであるが，これらの足どりをいわば予備的叙述として，つ

ぎに本題である資本主義社会をとりあげ，そこでの分業のもつ重大な意義について，簡単な理論的考察をこころみることにしたいと考える。

4．資本主義社会における分業の実態とその社会的・経済的意義

周知のように，資本による生産は，それ以前に支配的であった同職組合手工業とちがって，必ず多数の賃銀労働者が，同時に，同じ空間で，同じ種類の生産のために，同じ資本家の指揮のもとで働くということを，必須条件としている。その最初にあらわれる作業方法は，それ以前のギルドと同じく，個別的労働者が同一の作業過程を担当する，たんなる同時的作業という意味での単純な協業にすぎないが，しかし，この単純な協業の形態は，まもなく分業にもとづく多数の労働者の協業，すなわちマニュファクチュアの形態に発展をとげ，そして，このマニュファクチュアはまた，機械および機械体系を基本とする多数の労働者の協業の形態に，すなわち機械制大工業にとって代わられ，この機械制大工業の発展したものが資本主義的生産の支配的形態となるのである。そこで，ここでは，まず，マニュファクチュアと機械制大工業とにおける分業のあり方とその意義を簡単に見ることにし，そのあとで，とくに資本主義社会において分業がもつ重大な意義の主なものについて，その要点を指摘することにしたいとおもう。

a）マニュファクチュアおよび機械制大工業のもとでの分業

同じ資本のもとで多数の賃銀労働者が同時に同じ種類の作業に従事するところの，いわゆる単純な協業においても，それが同じ人数の労働者が離ればなれに個別的作業を行なう場合にくらべて，その労働の成果，いいかえれば労働の生産力がいかにより大きいものであるかということについては，周知のように『資本論』第1巻第11章「協業 Kooperation」の中こ的確な説明があたえられている。マニュファクチュアは，その単純な協業による労働の生産力の増進の上にさらに，分業による労働の生産力の増進が重なり合ったもの，ということができる。

「マニュファクチュアの時代」を代表するアダム・スミスは，その主著『諸国民の富』の最初の第1編「労働の生産諸力における改善の諸原因について，また，その生産物が人民のさまざまの階級のあいだに自然的に分配される秩序について」の冒頭に「分業について Of the Division of Labour」と題する第1章をおいていることはさきに見たところであるが，そこでの「分業」は，いうまでもなく，当時勃興しつつあったマニュファクチュアにおける分業を指していっているのである。スミスがこのマニュファクチュアの分業にいかに力点をおいていたかは，その第1章の最初におかれたつぎの文章がこれをよく示している。

「労働の生産諸力における最大の改善と，またそれをあらゆる方面にふりむけたり，充用したりするばあいの熟練，技巧および判断の大部分とは，分業の結果であったように思われる」

(ibid. p. 3. 訳 I. 68ページ)。

スミスは，右につづいて，「ピン製造業のばあい」を一例として労働の生産力の増進を説明し，

「分業の効果は，あらゆる技術や製造業においても，このきわめて零細な製造業と同様である」(ibid. p. 5. 訳 I. 70ページ)。

と述べたのち，分業が労働の生産力を増進させる理由について，つぎのような説明をあたえている。

「分業の結果として，同人数の人々がなしうる仕事の量がこのように増加するのは，三つの異なる事情，すなわち第一に，あらゆる個々の職人の技巧の増進，第二に，ある種の仕事から別の仕事に移るばあいにふつうには失われる時間の節約，そして最後に，労働を促進し，また短縮し，しかも一人で多数人の仕事をなしうるようにする多数の機械の発明，に由来するのである」(ibid. p. 7. 訳 I. 72—73ページ)。

この分業にかんするスミスの考え方について，注意しなければならないのは，かれが，マニュファクチュア内分業と社会内分業とを同じ性質のものとして，これをつぎのように説明している点である。第2章「分業をひきおこす原理について」の冒頭のパラグラフにはこう述べられている。

「これほど多くの利益がひきだされるこの分業というものは，本来，それがひきおこす一般的富裕を予見したり，意図したりする人間の英知の所産ではない。それは，このように広範な効用にはまったく無頓着な，人間の本性のなかにある一定の性向，つまりあるものを他のものと取引し，交易し，交換するという性向の，緩慢で漸進的ではあるが必然的な帰結なのである」(ibid. p. 13. 訳 I. 81ページ)。

「あるものを他のものと取引し，交易し，交換するという性向」という，スミス自身の言葉が示しているのは，すでにそこにあるのは，私的所有にもとづく商品生産社会であって，そこには自然発生的な社会的分業が支配しており，そこではすべての人間は，その私的に所有する物を私的に交換しなければ生きてゆけないという特定の生産関係の支配する歴史的社会にほかならない，ということである。右のようなマニュファクチュア内分業と社会内分業とを同一性質の分業と解するスミスの誤りは，たとえば，第4章「貨幣の起源と使用について」において，貨幣の起源を説明するものとして，「分業」の確定をもってきているところにもよく示されている。こうした誤謬は，資本主義社会を永遠に繁栄する文明社会ととらえているスミスの基本的考え方から出ていることはいうまでもないのであって，マルクスは，このスミスの根本的誤謬を明確に示すために，『資本論』第1巻第12章「分業とマニュファクチュア」の第4節をことさら「マニュファクチュアのなかでの分業と社会のなかでの分業」と題して，そのなかで，この二つの分業の根本的な相違を明確に説明しているのである。その中には，本論稿の「2」でとりあげられた分業の歴史的形態とも関連のある叙述部分も見出されるので，右の第4節のなかから二個所だけ引用してかかげておくことにしよう。

「社会のなかでの分業と，それに対応して諸個人の特殊な職業部面に局限されることとは，マニュファクチュアのなかでの分業と同じように，相反する諸出発点から発展する。一つの家族のなかで，さらに発展しては一つの種族のなかで，性の区別や年齢の相違から，つまり純粋に生理的な基礎の上で，自然発生的な分業が発生し，それは共同体の拡大や人口の増加につれて，またことに異種族間の紛争や一種族による他種族の征服につれて，その材料を拡大する。他方，前にも述べたように，生産物交換は，いろいろな家族や種族や共同体が接触する地点で発生する。なぜならば，文化の初期には独立者として相対するのは個人ではなくて家族や種族などだからである。共同体が違えば，それらが自然環境のなかに見いだす生産手段や生活手段も違っている。したがって，それらの共同体の生産様式や生産物も違っている。この自然発生的な相違こそは，いろいろな共同体が接触するときに相互の生産物の交換を呼び起こし，したがってこのような生産物がだんだん商品に転化されることを呼び起こすのである。交換は，生産部面の相違をつくりだすのではなく，違った諸生産部面を関連させて，それらを一つの社会的総生産の多かれ少なかれ互いに依存しあう諸部門にするのである。この場合に社会的分業が発生するのは，もとから違ってはいるが互いに依存しあってはいない諸生産部面のあいだの交換によってである。前のほうの場合，つまり生理的分業が出発点となる場合には，一つの直接に結成されている全体の特殊な諸器官が，他の共同体との商品交換から主要な衝撃を受ける分解過程によって互いに分離し，分解し，独立して，ついに，いろいろな労働の関連が商品としての生産物の交換によって媒介される点に達するのである。一方の場合には以前は独立していたものの非独立化が行なわれるのであり，他方の場合は以前には独立していなかったものの独立化が行なわれるのである」(Marx-Engels Werke, Bd. 23. s. 372—373. 邦訳大月版 461—462ページ)。

「とはいえ，社会のなかでの分業と一つの作業場のなかでの分業とのあいだには多くの類似や関連があるにもかかわらず，この二つのものはただ程度が違うだけではなく，本質的に違っている。類似が最も適切に争う余地のないものに見えるのは，一つの内的な紐帯によっていろいろな業種がつなぎあわされている場合である。たとえば飼畜業者は皮を生産し，製革業者は皮を革に変え，製靴業者は革を長靴に変える。この場合には各業者はそれぞれ一つの段階生産物を生産するのであって，最後のできあがった姿は，彼らのいろいろな特殊労働の結合生産物である。さらにさまざまな労働部門があって，それらが飼畜業者や製革業者や製靴業者に生産手段を供給する。そこで，A・スミスのように，この社会的分業はただ客観的に，すなわち観察者にとって，マニュファクチュア的分業と区別されるだけだ，と考えることもできる。この観察者は，後者ではいろいろな部分労働が一見して明らかに空間的にいっしょに行なわれているのを見るが，前者では広い面にわたる部分労働の分散と各特殊部門の大きな従業者数とが関連を不明にしているのを見るのである。だが，なにが飼畜業者や製革業者や製靴業者のそれぞれの独立した労働のあいだに関連をつくりだすのか？　それは，彼らのそれぞれの生産物の商品としての定在である。これにたいして，マニュファクチュア的分業を特徴づけるものはなに

か？　それは，部分労働者は商品を生産しないということである。何人もの部分労働者の共同の生産物がはじめて商品になるのである。社会のなかでの分業は，いろいろな労働部門の生産物の売買によって媒介されており，マニュファクチュアのなかでのいろいろな部分労働の関連は，いろいろな労働力が同じ資本家に売られて結合労働力として使用されるということによって媒介されている。マニュファクチュア的分業は，一人の資本家の手中での生産手段の集積を前提しており，社会的分業は，互いに独立した多数の商品生産者のあいだの生産手段の分散を前提している。マニュファクチュアでは比例数または比例関係の鉄則が一定の労働者群を一定の機能のもとに包摂するのであるが，これに代わって，いろいろな社会的労働部門のあいだへの商品生産者と彼らの生産手段との配分では偶然と恣意とが複雑に作用する。……（以下略）……」(ibid. Bd. 23. s. 375—376. 訳 465—466ページ)。

なお，マニュファクチュアにおける分業の本質的特徴について，マルクスは，同じ第1巻第12章の第5節「マニュファクチュアの資本主義的性格」のなかできわめて適切な分析をおこなっているのであるが，そこにはまたマニュファクチュアの基本構成要素としての部分労働者とその道具についての明確な特徴づけも示されているので，いまそのうちの主要部分を抜粋してかかげ，これについてのつたない解説は省くことにしよう。

「マニュファクチュア的分業は，手工業的活動の分解，労働用具の専門化，部分労働者の形成，一つの全体機構のなかでの彼らの組分けと組合せによって，いくつもの社会的生産過程の質的編制と量的比例性，つまり一定の社会的労働の組織をつくりだし，同時にまた労働の新たな社会的生産力を発展させる。社会的生産過程の独自に資本主義的な形態としては——それは既存の基礎の上では資本主義的な形態でしか発展しえなかったのであるが——，マニュファクチュア的分業は，ただ，相対的剰余価値を生みだすための，または資本——社会的富とか「諸国民の富」とか呼ばれるもの——の自己増殖を労働者の犠牲において高めるための，一つの特殊な方法でしかない。それは，労働の社会的生産力を，労働者のためにではなく資本のために，しかも各個の労働者を不具にすることによって，発展させる。それは，資本が労働を支配するための新たの諸条件を生みだす。したがって，それは，一方では歴史的進歩および社会の経済的形成過程における必然的発展契機として現われ，同時に他方では文明化され洗練された搾取の一方法として現われるのである」(ibid. Bd. 23. s. 386. 訳 478ページ)。

細分化された特殊な手工道具を操作する部分労働者の熟練度の向上には必然的に限界があってそれ以上の労働の生産力の増進は望みないこと，生産の主体としての熟練労働者の資本にたいする抵抗の強いこと，そしてますます増大する世界市場の要求に応える必要が高まってきたこと——こうしたことが，マニュファクチュアの資本主義的生産方法としての限界を明示したのであって，ここに部分労働者に代わって，機械・自動機械体系を主体とする新たなより進んだ生産方法として機械制大工業が生まれることになったのであるが，この機械制大工業こそが，資本にとって最高・最善の生産形態であることは，いまさら冗説を要しないところである。機

械制大工業も，マニュファクチュアと同じように，多数の労働者の協業により，そこに分業がひろく展開されているのであるが，しかし，その分業の内容は本質的に異なったものとなっているのである。以前には，それぞれ特殊な道具を扱う部分労働者全体が生産の生きた主体であったが，いまでは，生産の主体は，人間から独立した，死んだ機械体系であり，労働者はそれぞれの部分機械に付属してこれに奉仕する生きた付属物でしかなくなる。分業は，機械体系そのものによって決定され，支配されるものとなっているのである。マニュファクチュア内分業と機械制大工業における分業とのあいだの本質的相違についてマルクスが与えている的確な叙述をつぎに引用してかかげておこう。

「ところで，機械は古い分業体系を技術的にくつがえすとはいえ，この体系は当初はマニュファクチュアの遺習として慣習的に工場のなかでも存続し，次にはまた体系的に資本によって労働力の搾取手段としてもっといやな形で再生産され固定されるようになる。前には一つの部分道具を扱うことが終生の専門であったが，今度は一つの部分機械に仕えることが終生の専門になる。機械は労働者自身を幼少時から一つの部分機械の部分にしてしまうために，濫用される。こうして労働者自身の再生産に必要な費用がいちじるしく減らされるだけではなく，同時にまた，工場全体への，したがって資本への，労働者の絶望的な従属が完成される。ここでも，いつものように，社会的生産過程の発展による生産性の増大と，この過程の資本主義的利用による生産性の増大とを区別しなければならないのである。

マニュファクチュアや手工業では，労働者が自分に道具を奉仕させ，工場では労働者が機械に奉仕する。前者では労働者から労働手段の運動が起こり，後者では労働手段の運動に労働者がついて行かなければならない。マニュファクチュアでは労働者たちは一つの生きている機構の手足になっている。工場では一つの死んでいる機構が労働者たちから独立して存在していて，彼らはこの機構に生きている付属物として合体されるのである」(ibid. Bd. 23. s. 445. 訳 551—552 ページ，傍点—山本)。

b）　人間労働力の歪曲・萎縮ならびに破壊

マニュファクチュアにおいては，賃銀労働者は，たんに資本のためにできるだけ大きな剰余価値を生みだしてやる生きた材料でしかなく，そのために，ある特定の細部機能だけをできるだけ短時間に遂行しうるように，したがって他の諸機能を果しうる能力や素質は伸ばすどころか，それらはすべて禁圧されなければならないように仕込まれるのである。人間労働力の正常な多面的な発展はまったくみられず，その労働力全体がある細部機能だけしか果しえないようなものに歪められ，おしこまれてしまうのである。マルクスは，さきにあげた第5節「マニュファクチュアの資本主義的性格」のなかで，この人間労働そのものの歪曲・萎縮について的確な説明を与えているので，そのなかからすこしく要点を引用してかかげておこう。

「……単純な協業はだいたいにおいて個々人の労働様式を変化させないが，マニュファクチュアはそれを根底から変革して，個人的労働力の根元をとらえる。それは労働者を歪めて一つの奇形物にしてしまう。というのは，もろもろの生産的な本能と素質との一世界をなしている人間を抑圧することによって，労働者の細部的熟練を温室的に助長するからである。それは，ちょうどラプラタ沿岸諸州で獣から毛皮や脂肪をとるためにそれをまるまる一頭屠殺してしまうようなものである。それぞれの特殊な部分労働が別々の個人のあいだに配分されるだけではなく，個人そのものが分割されて一つの部分労働の自動装置に転化され，こうして，メネニウス・アグリッパの寓話，すなわち一人の人間をそれ自身の身体の単なる一断片だと言うばかげた寓話が現実のものにされるのである。元来は，労働者が自分の労働力を資本に売るのは，商品を生産するための物質的手段が自分にないからであるが，今では彼の個人的労働力そのものが，資本に売られなければ用をなさないのである。労働力は，それが売られた後にはじめて存在する関連のなかでしか，つまり資本家の作業場のなかでしか，機能しないのである。マニュファクチュア労働者は，その自然的性質からも独立なものをつくることはできなくなっているので，もはやただ資本家の作業場の付属物として生産的活動力を発揮するだけである。エホバの選民の額には彼がエホバのものだということが書いてあったように，分業はマニュファクチュア労働者に，彼が資本のものだということを表わしている焼き印を押すのである」(ibid. Bd. 23. s. 381—382. 訳 472—473ページ，傍点—山本)。

「ある種の精神的肉体的不具化は，社会全体の分業からさえも不可分である。しかし，マニュファクチュア時代は，このような諸労働部門の社会的分割をさらにいっそう推し進め，他面ではその特有の分業によってはじめて個人をその生命の根源からとらえるのだから，それはまた産業病理学のための材料や刺戟をもはじめて供給するのである」(ibid. Bd. 23. s. 384. 訳 476ページ，傍点—山本)。

このようにして，マニュファクチュア的分業のもとでは，労働者の担っている人間労働力の歪曲・萎縮または不具化が必然的に伴なわざるをえないが，しかし，こうした人間労働力の破壊現象は，マニュファクチュアのもとでは，機械制大工業のもとでのそれと比べて，なお多少とも「堪えられる」ものだということができるであろう。というのは，マニュファクチュア的分業のもとでは，労働者はその人間労働力の支出をある特定の細部機能にきびしく限定しなければならないとはいえ，労働者は道具を自分の意思にしたがって働かす生産主体であり，そのかぎりで自身の労働力を自主的に働かすものとなっているのに反して，機械制大工業では，生産主体は機械・機械体系そのものであって，労働者はひたすら機械に奉仕するものとなり，機械の運動の命ずるままにその労働力を支出し，またその支出を禁圧しなければならず，自主的に労働力を支出することによって人間労働力の維持＝再生産をはかることはまったく不可能となっているからである。このような，機械制大工業による人間労働力の限界知らずの破壊について，マルクスはつぎのように指摘しているが，これがまことに真実をとらえた金言であるこ

とは，今日わが国の自動車産業界において一般的な労働力破壊現象，とくに精神障害の多発・深刻化に照らしても，争う余地のないところである。

「機械労働は神経系統を極度に疲らせると同時に，筋肉の多面的な働きを抑圧し，身心のいっさいの自由な活動を封じてしまう。**労働の緩和でさえも責め苦の手段になる。なぜならば，機械は労働者を労働から解放するのではなく，彼の労働を内容から解放するのだからである。**資本主義的生産がただ労働過程であるだけではなく，同時に資本の価値増殖過程でもあるかぎり，どんな資本主義的生産にも労働者が労働条件を使うのではなく逆に労働条件が労働者を使うのだということは共通であるが，しかしこの転倒は機械によってはじめて技術的に明瞭な現実性を受け取るのである。一つの自動装置に転化されることによって，労働手段は労働過程そのもののなかでは資本として，生きている労働力を支配し吸いつくす死んでいる労働として，労働者に相対するのである」(ibid. Bd. 23. s. 445—446. 訳 552—553ページ，ゴシック体—山本)。

c）精神労働と肉体労働との対立

マルクスは，1845年から1846年にかけて盟友エンゲルスと協力して準備した労作，『ドイツ・イデオロギー "Die deutshe Ideologie"」のなかの「歴史　Gesehichte」と題する節のなかで，精神労働と肉体労働との対立にふれて，

「労働の分割は物質的労働と精神的労働の分割が現われてくる瞬間からはじめてほんとうに分割になる*。この瞬間から意識は現におこなわれている実践の意識とはなにか別物でもあるかのように実際に思いこむことができ，現実的ななにものをも表象していないのに現実的になにものかをも表象してでもいるかのように実際に思いこむことができ，——この瞬間から意識は世界からのがれ出て「純粋な」観想，神学，哲学，道徳等々の形成へ移ってゆくことができる」(Marx-Engels Werke, Bd. 3. s. 31. 訳大月版27ページ，傍点—マルクス)

と述べ，そのうちの＊印をつけた個所について，つぎのような傍注を施している。

「イデオローグの最初の形態である僧侶がこれと時を同じうする」(ibid. Bd. 3. s. 31. 訳28ページ，傍点—マルクス)。

それゆえ，精神労働と肉体労働との分割＝対立は，すでに原始共同社会の内部においてもみられたのであり，人間社会の歴史的発展および労働生産力の増進に伴って，その対立はしだいに拡大・強化され，肉体労働だけを強いられる被圧迫・被搾取階級から搾りあげられる大量の剰余生産物によって養われるところの，精神労働のみを事とする階層も，しだいに発達をとげてきたものである。このような意味での精神労働と肉体労働との対立はもっとも発展した階級社会である資本主義社会において，さらに一段と拡大・強化された形で維持＝再生産されていることはもちろんのことであるが，この資本主義社会では，そうした点のほかに，精神労働と肉体労働との対立が資本の支配の強化，働く人民大衆の人間労働力のいっそうの歪曲と萎縮を

推し進める役割をはたしているものだということを明確に認識することが肝要である。この点について，貴重な示唆を与えていると考えられるマルクスの叙述を，すこしくつぎにかかげてみよう。

マルクスは，『資本論』第1巻第11章「協業」の中で

「すべての比較的大規模な直接に社会的または共同的な労働は，多かれ少なかれ一つの指図〔Direktion〕を必要とするのであって，これによって個別的諸活動の調和が媒介され，生産体の独立な諸器官の運動とはちがった生産体全体の運動から生ずる一般的な諸機能が果されるのである」(ibid. Bd. 23. s. 350. 訳大月版434ページ)

と述べて，オーケストラにとって指揮者が必要であることを説明している。こうした指揮は，もちろん肉体労働ではなく，精神労働にほかならないが，わが国には，こうした指揮・監督の超階級的科学性を主張して，この資本主義国において「科学としての経営学」がりっぱに存在するのだと力説してやまない，「科学的社会主義」を看板とする，おめでたい自称「マルクス経営学者」もすくなくないのであるが，これらの先生方は，マルクスが右につづいてすぐ述べている文章がその目にまったく入らないのである。

「この指揮や監督や媒介の機能は，資本に従属する労働が協業的になれば，**資本の機能になる。**資本の独自的な機能として，指揮の機能は独自な性格をもつことになるのである」(ibid. Bd. 23. s. 350. 訳434ページ，ゴシック体—山本)。

右のような特別の精神労働が，過酷な肉体労働のみにしばりつけられている賃銀労働者大衆にたいしてどのような「科学的」作用をはたすものであるかということを懇切丁寧に解明してくれている，右につづくマルクスの金文字は，逆立ちしても，彼らの目には入らないのである。

「まず第一に資本主義的生産過程の推進的な動機であり規定的な目的であるのは，資本のできるだけ大きな自己増殖，すなわちできるだけ大きい剰余価値の生産，したがって資本家による労働力のできるだけ大きな搾取である。同時に就業する労働者の数の増大につれて彼らの抵抗も大きくなり，したがってまたこの抵抗を抑圧するための資本の圧力も必然的に大きくなる。資本家の指揮は，社会的労働過程の性質から生じて資本家に属する一つの特別な機能であるだけではなく，同時にまた一つの社会的労働過程の搾取の機能でもあり，したがって搾取者とその搾取材料との不可避的な敵対によって必然的にされているのである。同様に，賃銀労働者にたいして他人の所有物として対立する生産手段の規模が増大するにつれて，その適当な使用を監督することの必要も増大する。さらにまた，賃銀労働者の協業は，ただ単に，彼らを同時に充用する資本の作用である。彼らの諸機能の関連も生産的全体としての彼らの統一も，彼らの外にあるのであり，彼らを集めてひとまとめにしておく資本のうちにあるのである。それゆえ，彼らの労働の関連は，**観念的には資本家の計画として，実際的には資本家の権威として，**彼らの行為を自分の目的に従わせようとす**る他人の意志の力として，**彼らに相対するのである。

(ibid. Bd. 23. s. 350—351. 訳434—435ページ，傍点およびゴシック体—山本)。

ここに明らかにされている精神労働＝指揮・監督・搾取・抑圧と肉体労働＝被搾取・被抑圧の対立は，機械制大工業をふくめてすべての資本主義的協業形態に見られるものであって，資本主義的生産がますます大規模になればなるほど，それはますます質的にも量的にも強化・拡大されるのであるが，なおそのほかに，マニュファクチュアおよび機械制大工業においては，さらに新たな対立関係が，いわば加重されることになっているのであって，これについてマルクスが解明しているところをつぎに簡単に紹介しておこう。

まず，マニュファクチュアについて。

「未開人があらゆる戦争技術を個人の知能として用いるように，独立の農民や手工業が小規模ながらも発揮する知識や理解や意志は，今ではもはやただ作業場全体のために必要なだけである。生産上の精神的な諸能力が一方の面ではその規模を拡大するが，それは，多くの面ではそれらがなくなるからである。部分労働者たちが失うものは，彼に対立して資本のうちに集積される。部分労働者たちにたいして，物質的生産過程の精神的な諸能力を，他人の所有として，また彼らを支配する権力として，対立させるということは，マニュファクチュア的分業の一産物である。この分離過程は，個々の労働者たちにたいして資本家が社会的労働体の統一性と意志とを代表している単純な協業にはじまる。この過程は，労働者を不具にして部分労働者にしてしまうマニュファクチュアにおいて発展する。この過程は，科学を独立の生産能力として労働から切り離しそれに資本への奉仕を押しつける大工業において完了する」(ibid. Bd. 23. s. 382. 訳473—474ページ)。

機械制大工業について。

「……生産過程の精神的な諸力が手の労働から分離するということ，そしてこの諸力が労働にたいする資本の権力に変わるということは，すでに前にも示したように，機械の基礎の上に築かれた大工業において完成される。個人的なからっぽになった機械労働者の細部の熟練などは，機械体系のなかに具体化されていてそれといっしょに「主人」(master) の権力を形成している科学や巨大な自然力や社会的集団労働の前では，とるに足りない小事として消えてしまう。それだからこそ，この主人，すなわちその頭のなかでは機械と自分の機械独占とが不可分に合生しているこの主人は，争いが起きると，「職工たち」に向かって人をばかにした態度で次のように呼びかけるのである。

『工場労働者たちはこういうことをしっかりおぼえておかなくてはいけない，というのは，自分たちの労働がじつは非常に低級な種類の熟練労働だということ，これほど身につけやすい労働，その質から見てこれほど報酬のよい労働はほかにはないということ，最低の経験者をちょっと訓練するだけでこれほど短時間にこれほどたっぷり得られる労働はほかにはないということである。じっさい，主人の機能は，6カ月の教育で仕込むことができてどんな農僕にもおぼえられるような労働者の労働や技能よりもずっと重要な役を，生産の仕事で演ずるのである』」(ibid. Bd. 23. s. 446. 訳552—553ページ)。

ここに吐露されている「主人」＝資本家の本音ほど，今日の日本の先進的大工場，とくに自動車製造大資本家にとってお誂えむきの口上はほかにないであろう。——曰く，「数個のネジを10秒間に車体のそれぞれの個所に取り付けるという作業をくりかえすだけの仕事——こんなにも簡単で，元手いらずの，だれにでもすぐ覚えられるやさしい労働が，いったい，ほかにあるだろうか！」

d） 都市と農村との対立

都市と農村との分離＝対立は，さきにも見たように，すでに古代社会にはじまり，中世社会から資本主義社会へと社会が発展するのにともなって，その対立関係はますます拡大・強化されてきたものである。マルクスは，さきにあげた労作，『ドイツ・イデオロギー』のなかで，この対立について，こう述べている。

「物質的労働と精神的労働という最大の分割は都市と地方の分離である。都市と地方の対立は野蛮から文明への，部族制から国家への，地方から全国への，移行とともに始まって，文明の歴史を今日（反穀物同盟）にいたるまで貫いている。——都市ができると同時に行政，警察，租税等々，約言すれば共同体組織，したがってまた政治一般がいやおうなしに必要となる。まずここに，労働の分割と生産用具に直接もとづくところの，人口の二大階級への分割が現われた。都市はすでに人口，生産用具，資本，享楽，必要物の集中の事実を示しているのにたいして，地方はその正反対の事実，離隔と孤立をあらわしている。**都市と地方の対立はただ私的所有の内部でのみ存在しうる。それは個人が労働の分割下に編入され彼に押しつけられた特定の活動に釘づけにされている状態のきわめてあざやかな表現**であって，そのような状態は一方の人間を偏狭な都市動物，他方の人間を偏狭な地方動物たらしめ，両者の利益の対立を日日に新しく生みだす」(ibid. Bd. 3. s. 50. 訳46ページ，ゴシック体—山本)。

ここに述べられていることは，まだ自由競争が支配していた産業資本主義の段階までのことである。というのは，独占＝金融資本の支配する今日の資本主義社会においては，都市と農村との対立は，むしろ都市への農村の隷属にとって代わられているといわなければならないからである。農村＝地方は都市，それも大都市によって政治的・経済的・文化的その他あらゆる社会的分野において隷属と収奪を強いられ，また大都市はそれ自身さまざまな解決しがたい矛盾・軋轢のもとに辛うじてその存在を保つという有様である。地方における過疎化のとめどもない進行と，大都市において生命を脅かす過度の大気汚染や公害・騒音とともに膨れあがりつづける過密人口，そして国家権力機構を通じて，またありとあらゆる金融通路を媒介として，地方から吸いあげられて大都市の金融資本の金庫の中に溢れ流れこむ貨幣の尨大量——こうしたものが，京市，いや中心的大都市による地方＝農村の支配と収奪を如実に示しているものといえよう。独占＝金融資本の完全に支配する今日の資本主義社会における大都市による農村の支

配＝隷属ならびに収奪については，なお注意すべき点が少なくないのであるが，本稿では以上の指摘にとどめておこう。

e）　寄生的諸階層の肥大化

ここに「寄生的階層」というのは，社会の存続にとって必要な仕事をなにひとつ担わないばかりか，その社会の生産する物資にたかって寄食している文字どおりの寄生虫的存在としての人間部類を指してのことである。こうした寄生虫的存在は，どんな人間社会にもあるというものではなく，原始共同社会には全くなく，また古代，中世を通じてもきわめて少ないものであったが，それが階層として生み出されるようになったのは，資本主義社会においてであり，とくにその驚くべき肥大化が進行しているのは，今日の独占＝金融資本の支配するその最高段階である。これについては，『反デューリング論』の第3篇「社会主義」のうちの「2　理論的概説」の中に述べられているつぎのくだりをまず念頭においておく必要がある。

「搾取する階級と搾取される階級，支配する階級と抑圧される階級とに社会が分裂していたのは，以前には生産の発展が貧弱だったことの必然的な結果であった。社会の総労働が，全員がかつがつ生きてゆくのに必要なものをほんのわずか上回るだけの生産物しかもたらさないあいだは，したがって，大多数の社会成員の時間の全部またはほとんど全部が労働にとられているあいだは，社会は必然的にいろいろな階級に分かれる。もっぱら労役に服するこの大多数者とならんで，直接の生産的労働から解放された一階級がかたちづくられ，彼らが労働の指揮，国務，司法，科学，芸術などの，社会の共同の業務にあたるのである。だから，階級区分の基礎にあるのは，分業の法則である。だが，それだからといって，このような諸階級への区分が暴力や強奪，奸計や欺瞞によって達成されたものではないということにはならないし，また，支配階級がひとたびその座にすわったなら，かならず労働する階級を犠牲として自分の支配をかため，社会的指揮を大衆の搾取に変えてきたということを，否定するものでもない」(Marx-Engels Werke, Bd. 20. s. 262—263. 邦訳大月版，290ページ)。

ところが，資本主義的生産がすばらしく発展をとげた独占＝金融資本の支配する帝国主義段階にいたって，右の事情は根本的に変化したものである。「社会の総労働」をもってしても，「全員がかつがつ生きてゆくのに必要なものをほんのわずかに上回る生産物しかもたらさない」とは，資本主義的生産の低度の段階までのことであって，いまでは「総労働」どころか，まさに「半数以下の労働」によって，もしそれが人間労働力の維持＝再生産に必要なだけの生産物がもれなく労働力の担い手である人々に分配されるとしたならば，ありあまるほど十分な量の必要生産物が現実につくりだされているのである。だが，それにもかかわらず，現実に生産を支えている真に社会的人間である勤労人民大衆が，「かつがつ生きてゆくのに必要なものをほんのわずか上回るだけの生産物しか」恵まれないという現実があるのであって，それはひと

えに，資本主義的私的所有にもとづく階級支配体制が強固にできあがっているからであり，また，その最高の段階である独占＝金融資本の支配体制のもとでは，社会の存続に必要な生産的労働にたずさわることなどおろか，まともな「社会の共同の業務」にもいっさいかかわることなく，もっぱら他人の生産物にたかって自分個人の私的享楽にその日その日を送っているだけという，はじめに述べた寄生虫的存在が，大量に生み出されているからである。このような寄生的階層の必然性については，すでにレーニンがその名著，『資本主義の最高の段階としての帝国主義』"Империализм, как высшая стадия капитализма"（1916年）の中でこれを解明しているのであって，彼は，その第8節「資本主義の寄生性と腐朽」のなかで，J・A・Hobsonの労作，『帝国主義 „Imperialism"』（1902年）について，その中のイギリスの外国貿易および対外投資からの収益について論述している数字を引いて，こう述べているのである。（『　』内はホブソンの文章）

「『大ブリテンが外国貿易と植民地貿易との総額，すなわち輸出入から得ている年収入総額は，統計家ギッフェンによって，1899年には，取引総額8億ポンド・スターリングの2.5％とみて，1800万ポンド・スターリング（約1億7,000万ルーヴリ）と見つもられている』。この額がどれほど大きいとしても，それはまだイギリスの侵略的帝国主義を説明することはできない。それを説明するものは，「投下された」資本からの収入，すなわち金利生活者層の収入をあらわす，9,000万～1億ポンド・スターリングという金額である。

金利生活者の収入が，世界最大の「貿易国」の外国貿易からの収入の，5倍にものぼっているのだ！　ここに帝国主義と帝国主義的寄生性との本質がある」（Ленин, Сочнения, том. 22, стр. 264. 邦訳大月版，320ページ，傍点―レーニン）。

この数字は，1899年のものである。それからほとんど1世紀のちの今日の，世界一の「金満国」と称される日本での金利生活者層や大土地所有者層，株式投機業者層，高層マンションから大中のアパート・貸家から大小の土地まで，ありとあらゆる不動産からしこたまあがってくる各種の高額賃料をふところにいれている階層，「社会の共同の業務」どころでないにもかかわらずそうした看板のもとに国庫や自治体から莫大な資金をただどりしている無数の組織・運動にたかっている厚い層，そして，これらの文字どおりの寄生的存在＝「遊民」の享楽を満たすために続々と膨らみつづける各種の歓楽・遊興施設でよぎなく不生産的労働を強いられているおびただしい数に上る従業者層から，ただただ金儲けのためのスポーツだけにその日その日を送っているありとあらゆる種類の，これまたおびただしい数にのぼる寄生的「遊民層」，等々，挙げていけば，勤労人民大衆の生産的労働にたかって寄食しているまったくの寄生虫的階層のなんと限りなく広く，厚いことであろうか！

とはいえ，こうした分業の発展の「極致」ともいうべき，利子生活者層およびその他の寄生的諸階層のこの上なく「恵まれた優雅な楽園（パラダイス）」の展開を目前にして，正しく広い視野を見通す識者の眼には，分業にかんするきわめて重要なつぎの二つの事実がいやおうなしに映ってくる

のである。

そのひとつは，名著『反デューリング論』の中にちりばめられている，「達眼の士」エンゲルスのつぎの金文字である。

「……労働者ばかりでなく，労働者を直接または間接に搾取する階級もまた，分業を通じて，自分の活動の道具に隷属させられる。頭の空っぽなブルジョアは，自分自身の資本と自分自身の利潤欲との奴隷となる。法律家は，自分の化石化した法観念の奴隷となり，これらの法観念が一つの独自の力となって彼らを支配するようになる。一般に「教養ある身分」は，さまざまな局部的な狭さや一面性の，また自分自身の肉体的および精神的な近視性の奴隷となり，また，一つの専門に適合させられた教育を受けて，この専門そのもの――その専門というのがまったくののらくら生活である場合にさえ――に生涯しばりつけられる結果，**不具化**して，**自分のこの不具化の奴隷となる**」(ibid. Bd. 20. s. 272. 訳301ページ，傍点およびゴシック体一山本)。

いまひとつは，この「世界一金満国」の独占＝金融資本とこれにつながる抜け目のない各種資本は，「恩恵」を看板に仕立てて，世界のありとあらゆる開発途上国に進出して，おどろくほどの低賃銀でそこの住民労働力を搾取するばかりでなく，これまでの生活様式をぶちこわし，自然環境をとことんまで破壊しつくして住民が人間として生きてゆくことすら困難になるという事態をひきおこすことによって，そこからこたえられないほどの儲けを吸いあげてきている，ということである。「金満国」日本の膨大な数にのぼる寄生的階層の非人間的な人造「楽園」は，まさしく，飢餓・窮乏と無慈悲で徹底的な自然環境の破壊・悪化のもとで辛うじて生きつづけている開発途上諸国の住民すべてにとっての文字どおりの「地獄」の上につくりあげられているのである。

5.　共産主義社会における分業の揚棄の問題

ここで「分業の揚棄」といっているのは，分業，つまり労働の分割をやめて各個人が必要な労働を全部独りで行なうという意味ではない。そうではなくて，各個人がこれまでのようにある限られた特定の労働種類にしばりつけられて，その労働種類しか遂行できない一面的な，または不具化された労働力の持主となっていることを全面的に廃止するということであって，そのために，私は，「分業の廃止」という言葉を避けて，ことさら「分業の揚棄 das Aufheben der Teilung der Arbeit」という言葉を用いたのである。この分業の揚棄ということは，各個人についてみれば，必要に応じてあるときは肉体労働に，またあるときには精神労働に従事することができるというように，つまり，その担っている労働力すなわち精神的能力と肉体的能力とが均衡を保っていて，しかも高度に発展をとげたものであることが，絶対に必要な要件となっており，また，その労働の生産力はきわめて高い発達水準に達していて，たとえば一日のうちのほんの数時間だけが生産的労働にあてられればそれで必要生産物は十分豊かにつくりだ

されるというようになっていることが必要不可欠である。このような高度に発達した人間労働力をつくりだす可能性も，――また右のようなきわめて高い生産力をつくりだす可能性も，いや，むしろその両者をつくりだす必然性というべきであるが――資本そのものによって，機械制大工業というもっとも発達した資本主義的生産方法の支配とその一般化およびその高度の発展そのものがはじめて生みだすことができたものである。

機械制大工業の高度の発展そのものが全面的に発達した人間労働力をつくりだす可能性と必然性については，『資本論』第1巻第13章「機械と大工業」の第9節「工場立法（保健・教育条項）イギリスにおけるその一般化」のうちのつぎの叙述部分が，これを精確に教示してくれている。

「……機械や化学的行程やその他の方法によって，近代工業は，生産の技術的基礎とともに労働者の機能や労働過程の社会的結合をも絶えず変革する。したがってまた，それは社会のなかでの分業をも絶えず変革し，大量の資本と労働者の大群とを一つの生産部門から他の生産部門へと絶えまなく投げ出し投げ入れる。したがって，大工業の本性は，労働の転換，機能の流動，労働者の全面的な可動性を必然的にする。他面では，大工業は，その資本主義的形態において，古い分業をその古い分枝をつけたままで再生産する。われわれはすでに，どのようにこの絶対的矛盾が労働者の生活状態のいっさいの静穏と固定性と確実性をなくしてしまうか，そして彼の手から労働手段とともに絶えず生活手段をもたたき落そうとし，彼の部分機能とともに彼自身をもよけいなものにしようとするか，を見た。また，どのようにこの矛盾が労働者階級の不断の犠牲と労働力の無際限な濫費と社会的無政府の荒廃とのなかであばれ回るか，を見た。これは消極面である。しかし，いまや労働の転換が，ただ圧倒的な自然法則としてのみ，また，いたるところで障害にぶつかる自然法則の盲目的な破壊作用を伴ってのみ，実現されるとすれば，大工業は，いろいろな労働の転換，したがってまた労働者のできるだけの多面性を一般的な社会的生産法則として承認し，この法則の正常な実現に諸関係を適合させることを，大工業の破局そのものを通じて，生死の問題にする。大工業は，変転する資本の搾取欲求のために予備として保有され自由に利用されるみじめな労働者人口という奇怪事の代わりに，変転する労働要求のための人間の絶対的な利用可能性をもってくることを，すなわち，一つの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人の代わりに，**いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行なうような全体的に発達した個人**をもってくることを，一つの生死の問題にする」(ibid. Bd. 23. s. 511―512. 訳大月版，634ページ，ゴシック体―山本)。

だが，分業の揚棄，つまり，労働力の担い手である真実の人間の解放にとって，第一の根本条件は，資本が生産手段を独り占めにして無所有の賃銀労働者をつかってもっぱらできるだけ大きな剰余価値＝利潤を獲得せんがためにのみ生産が行なわれるという，資本主義的生産関係を全面的に廃棄して，社会にある生産手段のいっさいを，労働力の担い手である勤労人民大衆の結合体としての社会の手に移すことでなければならない。この点については，『反デューリ

ング論』の中に見出される適切な叙述を引用して，つたない解説にかえることにしよう。

「社会は，いっさいの生産手段の主人となり，これを社会的に計画的に使用することによって，これまでのように人間が自分自身の生産手段に隷属させられている状態をなくす。いうまでもなく，各人が解放されなければ，社会は自分を解放することはできない。だから，古い生産様式は根底から変革されなければならないし，ことに旧来の分業は消滅しなければならない。それに代わって，次のような生産組織が現われてこなければならない。それは，一方では，なんびとも，人間の生存の自然的条件である生産的労働にたいする自分の受持分を他人に転嫁することがでさず，他方では，生産的労働が人間を隷属させる手段ではなくなって，各人のいっさいの肉体的および精神的能力をあらゆる方面に発達させ発揮する機会を提供することによって，人間を解放する手段となり，こうしてかつては重荷であった生産的労働がたのしみになる，そういう生産組織である」[2] (ibid. Bd. 20. s. 273—274. 訳302ページ)。

エンゲルスが正確に規定している右の生産組織が実現するのは，まさしく共産主義社会であり，しかもその低い第一段階ではなく，高度に発展した，厳密な意味での共産主義社会においてでなければならないことはいうまでないところであるが，なお念のため，マルクスがその晩年の有名な労作，『ゴータ綱領批判』(“Kritik des Gothar Programms” のなかで右のエンゲルスの叙述内容と完全に符節を合わせて的確に明示している，共産主義社会の本質規定についての定式を，つぎにかかげてみよう。

「共産主義社会のより高度の段階で，すなわち個人が分業に奴隷的に従属することがなくな

2）共産主義社会における以上のような分業の揚棄の必然性についてのきわめて平易・明快な説明のひとつとして，私は，『反デューリング論』の第2篇「経済学」のうちの「6　単純労働と襲合労働」の中のつぎのくだりをあげたいと考える。

「……この洞察〔労働はどんな価値ももたないし，またもつことができないという洞察〕から，さらに次の洞富が生まれてくる。すなわち，分配は，それが純経済的な考慮によって支配されるかぎり，生産の利益によって規制されるであろうという，そして，生産を最もよく促進する様式は，社会のすべての成員がその能力を可能なかぎり全面的に発展させ維持し行使することのできるような分配様式であるという洞察である。いつかは職業的な荷車曳きも建築技師ももういなくなる時がくるということ，半時間建築技師として指図していた人が，建築技師としての彼の活動がふたたび要求されるまでしばらく荷車を曳くということは，デューリング氏が受けついだ有識階級の考え方からすれば，たしかに途方もないことと思えるにちがいない。職業的な荷車曳きを永久化するとは，結構な社会主義であることよ！」(ibid. Bd. 20. s. 186. 訳 207—208ページ，傍点—エンゲルス，〔　〕内は山本)。

この説明にたいして，「共産主義社会において荷車曳きなど持ち出すのは，とんでもない時代錯誤だ」といってけなすことしかしない論客もかつては少なくなかったようであるが，右の「酷評」は，客観的には，彼自身，共産主義社会では旧来の分業への固定的・奴隷的従属も，精神労働と肉体労働との対立も存しないこと，その場合，「荷車曳き」という労働は，主として肉体的能力を流動させる「たのしみとしての労働」の例としてあげられたものだということが読みとりえないこと，総じて共産主義社会の科学的規定についてはまったくちんぷんかんぷんだということの表白にすぎないのである。

り，それとともに精神労働と肉体労働との対立がなくなったのち，労働がたんに生活のための手段であるだけでなく，労働そのものが第一の生命欲求となったのち，個人の全面的な発展にともなって，またその生産力も増大し，協同的富のあらゆる泉がいっそう豊かに湧きでるようになったのち——そのときはじめてブルジョア的権利の狭い地平線を完全に踏みこえることができ，社会はその旗の上にこう書くことができる——各人はその能力におうじて，各人にはその必要に応じて！」(Marx-Engels Werke, Bd. 19. s. 21. 邦訳大月版 21ページ，傍点—山本)。

以上のような共産主義社会における分業の完全な揚棄と真実の人間の解放との見通しがいかに厳密な科学的論証によって疑いもなく基礎づけられているとしても，そこにいたるまでの道程の想像を絶する長さと同じく言語を絶する克服困難な障害の山積とについて，私たちは，けっして安易に考えてはならない。このより高い段階の共産主義社会の前には，より低い段階の共産主義社会があり，そこではまだ旧来の分業への奴隷的従属も，肉体労働と精神労働との対立も依然として残っており，しかも，資本主義社会が不可避的に遺した「経済的，道徳的，精神的」な「母斑」が根強く残存している。この段階では，すでにりっぱな「協同組合的社会」として生産手段の私的所有は全く消え失せ，労働生産物が商品となること，いいかえれば「価値」も「貨幣」もその存在が完全に一掃されているにもかかわらず，右の「母斑」の強力な残存の故に，各個人はいまだに「労働に応じて」の分配に依存せざるをえないのである。しかし，社会的生産が完全に計画的に行なわれ，社会的な「管理」と「計算」が実施できるまでには，まだ，どんなに数々の困難・障害と長い時間が必要となるであろうか？　ここでは，そこにいたる段階，つまり過渡期について立ちいることは控えなければならないが，ただひとこと，生産力低劣の上に貨幣物神が完全に支配しているいたく後れた社会をとらえて「社会主義国」と自称するのは，客観的にみれば，マルクス＝レーニンの教示の鉄面皮なふみにじりであり，また，今日の滔々たる反社会主義的思潮と親自由主義＝資本主義的運動を煽りたて力づけるという，寒心すべき社会的役割をはたしたもの，いや現にはたしつつあるものだということを指摘するにとどめておこう。

簡単な要約

はじめ原始共同社会では，人間労働力も未発達でその生産力もきわめて低く，そこでの分業はわずかに男女の間にあっただけである。しかし，異なった共同体との接触は，新たな分業を生みだし，この分業によって生産物交換がひろがるとともに，労働生産物の商品への転化とならんで，共同体内部に私有財産が生まれ，持てる者と持たざる者，富める少数者と貧しい多数者という階級的区別が生まれ，発展することになる。さらに商品生産の発展によって貨幣が生みだされると，分業はますます広く深く発展することになると同時に，これによって労働の生産力はいっそう発達することになる。ただし，その場合の労働は，分業に制約されて，当然に限られた種類の一面的なものであり，そのために人間労働力もその限られた一面的労働にのみ

適したものに，つまり一面的に発達した，したがって不具化した労働力にならざるをえない。不具化して一面的労働にしばりつけられているが故に，その面における労働の熟練，技巧はおのずから発達をとげることになる。ついで手工業と農業との分離につづいて手工業の内部で労働の分割が進み，それぞれ同職組合(ギルド)が組織されると，そこでの労働者＝職人は特定の種類の生産物の生産にしばられているとはいえ，その生産物の生産に必要な労働手段，原料，それに必要なさまざまな種類の作業のすべてについて，必要な知識と技術のすべてを身につけることが要求されたのである。限られた特定の労働種類についてであるとはいえ，そこでは，人間労働力，つまり精神的能力と肉体的能力とは，その仕事にかんするかぎり，均衡を保ってできるかぎり――たんなるくりかえしによる熟練の積み重ねを主とするものだとはいえ――育てあげることが必要要件であった。

しかし，資本が生産を握り，そこでマニュファクチュアが支配的に行なわれるようになると，分業はさらに質的発展をとげて，各労働者はある商品をつくるための多くの作業のうちの一つか二つだけの仕事しか担当しない部分労働者にされてしまい，彼の担っている人間労働力は，その限られた特定の種類の作業しかなしえない，したがってその他の必要な仕事については知識も作業能力も不必要・有害であるという，全く歪められ不具化したものとなる。限られた一面的支出の故にその労働の熟練度はきわめて高くなるが，しかし，その労働力は，資本のもとで働かされるかぎりで機能しうるのであって，ここに労働力の担い手は，資本のもとに搾取されないでは生きるすべもなく，総じて人間労働力は，すべてはじめから資本のためのもの，資本のものとなるのである。

しかし，資本主義的生産がさらに発展をとげて機械制大工業が支配する段階になると，生産の主体は，生きた部分労働者から死んだ機械・機械体系にとって代わられ，分業はこの主体によって決定され，人間労働力の担い手にとっては，いよいよきびしいものとなる。労働の生産力は，機械体系のおかげで，際限もなく増大するが，人間労働力そのものの不具化と破壊がその極限にまで達することは，上に述べたとおりである。そしてまた，この機械制大工業の高度の発展そのものが，反って，一面化・不具化した労働力ではなく，全面的に発達した人間労働力を大量につくりだしてこれに依存せざるをえないことになるという事情も，いまだ記憶に新しいところである。こうして機械制大工業の発展によって訓練され結合され組織される大工業プロレタリアートが，ついに，資本主義的私的所有にとどめを刺して高度に発展した生産力に照応した社会的所有の生産関係をうちたてる主導的勢力とならなければならないという，歴史的発展法則も，また，社会的所有のもとで高度に発展した共産主義社会において，はじめて，すべての社会的人間が全面的に発展した人間労働力の担い手となり，旧来の固定した分業の奴隷となることもなく，調和のとれた高度の精神的能力と肉体的能力とを――短時間の生産的労働をふくめて――「たのしみ」として，生活欲求として，流動させることになり，ここにはじめて動物社会とは全くちがった，真に人間社会の名に値する社会が築きあげられることになら

なければならないということも，知ることができたと思われる。

このようにしてみると，ほとんど動物社会に等しい原始共同社会の，きわめて低級な未発達の労働力の担い手である人間が，三つの階級社会のそれぞれにおいて，支配階級の搾取・抑圧のもとで，きわめて歪められた形でではあるがその人間労働力を発展させて，ついに人間社会の名に値する真の人間社会の建設者にふさわしい，全面的に発展した人間労働力の担い手として，鍛えあげられることになるまで，その苦難の道を推し進めたものは，まさしく人間的労働の分割であり，分業そのものであったということができるのではないか，そこにこそ，労働の分割の人間社会の発展にとっての――たとえ，それが労働力の担い手にとって惨苦にみちた，破壊的なものとして作用しなければならなかったとしても，まさに，その惨苦，破壊をこそ経ることによって――強力この上もない推進力としての意義があるのではないかと，私は考えるのである。

動物的水準の低い精神的能力と肉体的能力との調和のとれた結合としての原始的労働からはじまって，強力的にそれに緊縛された簡単・苛酷な肉体労働と主として訓練に依存する手工的・一面的労働を経て，資本のもとで労働の生産力の増進をいわば代償として，不具化し萎縮した人間労働力による部分労働，そしてさらに部分機械に仕える生きた付属物としての一面的・部分的労働が支配的になったのちに，ようやく，全面的に発展した人間労働力の流動が資本によって要求されるということになったのである。だが，すべての人間労働力の全面的発展が保障されそれが実現するのは共産主義社会においてであり，労働力の担い手すべてが賃銀奴隷の苦役を一掃して真に人間社会の主人公としての労働力の担い手になるためには，分業の自然発生的発展や資本によるその推進などではなく，そこには，資本主義的私的所有の完全な廃棄のための，まさに「命がけの飛躍」ともいうべき血みどろのたたかい，根本的変革のための革命的闘争が介在しなければならないことを，私たちはしかと銘記しておく必要がある。この「命がけの飛躍」を首尾よく成しとげることによって，人間的労働の分割，すなわち分業はその世界史的役割をみごとに完遂しえたものとなることができるであろう。

だが，そのための唯一の，決定的・絶対的な要件は，**ここでもまた，つねに**，人間労働力の担い手たち自身がすべて，真に社会的人間の名に値する**自覚と思想**をかたく身につけて主体的・能動的実践を貫きとおすこと――これ以外にはありえないのである。

(1989. 9. 24)